

何度でもやり直せる社会を目指して

【プロフィール】

1983年横浜生まれ。不登校・中退・ひきこもり・うつ・発達障害・社会人などもう一度勉強したい人のための個別指導塾「キズキ共育塾」などを経営するキズキグループ代表。発達障害があることによるいじめ、一家離散、暴走族のバシリなどを経て偏差値30からICU(国際基督教大学)に入学。卒業後、大手商社を経て2011年から現職。全国に9校ある共育塾の他、うつや発達障害の方のためのビジネスカレッジ事業、全国13の自治体・2つの省庁から受託した低所得世帯の子供支援を中心とした公民連携事業を展開している。



株式会社キズキ／特定非営利活動法人キズキ 代表 **やすだ ゆうすけ**
安田 祐輔

御自身の発達の特性や父からのDV、家出、非行を繰り返す生活から抜け出すために偏差値30からの大学合格。大手企業に勤めるもうつになり、ひきこもりへ。そこから困難を抱える方たち対象の日本初の大規模な塾を立ち上げ、「何度でもやり直せる社会をつくる」ことをビジョンに起業家として活躍する安田祐輔さんにお話を聞きました。

－株式会社キズキやNPO法人の概要、会社のビジョン・ミッションについて教えてください。

現在3つの大きな柱で事業を行っています。1つ目の柱が、中退や不登校の方を対象に特化したキズキ共育塾で、全国に9校舎（関東6、関西2、東海1）あります。埼玉県にも今年開塾したいと考えています。ただ、塾では、お金が無い御家庭への支援ができません。我々のビジョンは「何度でもやり直せる社会をつくる」ですので、お金がある人しか支援をしないというのはそれに反しています。ということで、国や地方自治体からの委託事業として、御家庭に負担のない支援も行っています。生活困窮されている方の学習支援ですとか、少年院から出てきた方の就労支援などです。今は13の自治体と2つの省庁からの委託を受けて事業を行っています。これが2つ目の柱の公民連携事業です。こういった自治体や国の事業を、提案書やプレゼンテーションを行って、応募した数社の中から選ばれています。弊社の強みは、他の塾や家庭教師の会社ではなかなか対応できないような、例えば生活保護・生活困窮で発達障害があり、さらにDVに苦しむような方たちに対しての支援にあります。そして、3つ目の柱はうつと発達障害に特化したビジネススクールです。うつや発達障害で働けなくなった人にマーケティングなどの最新のビジネススキルを教えて再就職を支援するスクールです。現在新宿に2拠点を構えて、横浜と大阪にも開校します。これは国の障害福祉サービスの就労移行支援施設として行っています。本人の負担は1割で、国が9割負担することとなっています。今までの福祉の在り方だと、うつや障害がある方の働き方は障害者雇用としての単純作業が多く、それ以外の仕事に就けないケースが多いのですが、そうではな

くて、発達障害を抱えていても、うつが長引いたとしても、もう一度ビジネスの現場で活躍することができると示したいと思ってやっています。開校にあたっては、国の障害福祉サービスの基準を満たす必要があるの、国の認可を取得するのが大変でした。でも、利用者さんの負担をなるべく減らしたかったのです。

我々はビジョンとして「何度でもやり直せる社会をつくる」を、ミッションとして「事業を通じた社会的包摂」を掲げています。3つの大きな柱も、これに沿った事業の展開です。支援を必要としている人に、しっかりと意味のある支援ができて、社員にもきちんと給料を払えるビジネスモデルを展開しているのがキズキという会社です。

この3つ以外にも、最近では企業向けに障害のある方の人材紹介を行っています。弊社には多くの障害者の方から問い合わせがありますので、働きたいという意欲のある方を企業へ紹介できるのです。人材紹介では、紹介先の企業から紹介料をいただきます。このように支援をしながらビジネスモデルとして持続する事業を模索しています。

－安田さんの子供時代のことについて教えてください。

「暗闇でも走る」（講談社2018）という僕の著書にも書いてあることなのですが、発達障害の課題と親や家族の課題があって、なかなか自分の居場所が無かったというのが小学校時代でした。勉強はそこそこできていたと思います。小学校の先生は、比較的好い先生が多かったです。今でも覚えているのは、親が家を出て行って落ち込んでいる時に、異変に気づいてくれて声をかけてくれた先生です。また、これは後日談になるのですが、小学校3年生の時の担任の先生が、僕の本を読んでくれて、御自身のお子さんのことでキズキ共育塾に相談にいらしたんです。実は僕は小3当時すごいいじめを受けていました。その先生は25年以上も前のことを覚えていて相談時に「あの時はすぐに気付いてあげられなくて…」と弊社の面談担当の社員に言ってくれたそうです。

これも発達障害の影響だと思うのですが、論理的に納得できないことは何も認められない小学生でした。当時学校で漫画は持ってきてはいけないものでした。だけど歴史漫画はみんな読んでよかったのです。でもそれで歴史の知識が身に付いているわけではない。「それはおかしい」と思って、僕は毎日ジャンプとか持って行って読んでました。他の子たちから「安田君が漫画読んでます」とか言われて、そうしたら先生が両方の意見を聞いてくれて、それ以降学校で漫画を読むことを認めてくれました。論理的に正しく考えたことに対しては認めてくれる、素晴らしい先生でした。僕にとってはよい成功体験となりました。



【小中学校時代を語る
安田さん】

また、いきさつは忘れましたが、「学校から出て行け」と先生に言われたことがあります。そこで僕が「憲法的に無理ですよ」と言うと、権利と義務について話をして、議論してくれたんです。面倒がらずにつきあってくださいました。

こういう、子供に丁寧に向き合う先生が必要だと思うのです。不登校の原因の約5割は先生だという報告もあります。キズキ共育塾の生徒さんでも先生が原因で不登校になったケースをよく見ます。「決まり切った規則を押しつけてくる」先生は、やはりどこかに「面倒だな」とか「問題を大きくしたくないな」という面があるのではと思います。子供たちはそれを敏感に感じて「自分たちのことを見てくれていない」という思いにつながり、不登校などにもつながります。一人一人の子供たちに丁寧に向き合っていくことが、学校の先生には求められていると思います。小学校時代の先生方に悪い印象がないのは、しっかりと向き合っ話を聞いてくれたからだと思います。

中学校は、家を出たい・自立したいということもあって、私立の全寮制の学校へ通いました。発達障害の特性で空気が読めなくて、よくいじめられました。それもつらかったですが、学校が非常に管理的なものだったですね。「東大に行くように指導される」とか「夜10時15分で消灯になる」とか、テレビや漫画も一切禁止でした。その全てに納得できる理由がないのです。結局2年生でやめてしまいました。3年生の時は公立に通いましたが、勉強はほぼしていませんでした。

高校は、ほとんどの生徒が大学に進学しない学校に行きました。高校時代は髪を金色に染めていたので、先生からよく注意をされました。本にも書きましたが、体育の先生が暴力的に指導をしてこようとした時、「今すぐメディアに言いますよ」と言うと、その先生は指

導をやめました。「そのぐらいの覚悟しかない先生なんだな」と思いました。子供は、先生の内面を感覚で理解します。「この先生はそこまで真剣でなくて、ただルールに従わせたいだけだな」とわかるのです。「メディアに出るのを覚悟でおまえのためにやっているんだ」「真剣に考えているんだ」となればまた違ってきます（もちろん、体罰を肯定する意味ではありません）。そこができるかできないかが先生の力量なんだと思います。

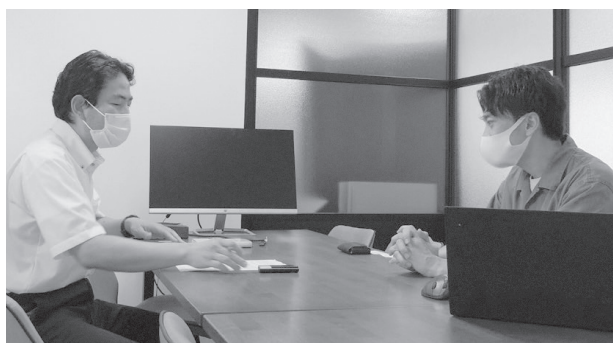
このように、高校の先生にあまりよいイメージはないのですが、一方で信頼できる先生もいました。一時期、地元の不良や暴走族に家を囲まれた時があって、その時担任の先生が送り迎えをしてくれたのです。その先生は、現在も僕の本を読んでくれたり、講演を聴きに來てくれたりして、「高校生の時そんなに苦しんでいるのを知らなかった」と謝罪に來てくださいました。今振り返ってみると、信頼できた先生だったなと思います。

もう1人、古文の先生がいました。その先生は、テストの答案の後ろに、僕に対して「あなたは本当はできる人なんだ」という意味のメッセージを、長文で書いてくれました。先生は僕の家庭が大変だということを知っていて、そう書いてくださったのだと思います。その先生は他の生徒からはあまり好かれておらず、「しつこい」とか「偽善者っぽい」などと思われていたようですが、僕はそんな風には捉えてなかったですね。純粋にメッセージをもらったときはうれしかったですね。

メッセージを書くのは、先生にとっても15～20分の時間がかかるかもしれませんが、子供にとっても非常に心に残ることがあるのです。逆に不登校の子たちが「先生がしつこく電話かけてきて、あれでますます行きたくなかった」ということをよく言います。それは学校の先生が「やらなければいけない」と思ってやっているからではないかと思います。また、やることによってこの子のためになると一様に思い込んでいるから届かないのではないのでしょうか。そうではなく、その子自身を見て、「この子はこんなアプローチやこん



【しっかりと子供たちに向き合うことが大切】



【その子にあったアプローチが必要】

なことを必要としている」ということまでしっかり考えて働きかけていくと、子供には伝わっていくのではないかと、私のかつての経験から振り返ると強く思います。

困難な状況にある子であればあるほど、その子にあった声かけをしてほしいと思います。本来でしたら、親やおじいちゃんおばあちゃんが言うことなのかもしれませんが、ですが、家族がしっかりしておらず、誰からも目をかけられていない子なら、先生が自分のことをしっかり見てくれて声をかけてくれたら、その子は「普通の子」が感じるより何倍もうれしく感じるのではと思います。

このように、小・中・高校と所々で見えてくれた先生がいて、そんな先生がいてくれたからこそ助けられたという思いはあります。

ーそこから大学を目指したきっかけはどのようなことからですか。

まず、アルバイトが何をやっても続かないということがありました。手先を使う仕事あまり得意でなくてすぐに馬鹿にされるし、興味ないことに全く集中できないので、単純作業はどんどんやる気がなくなっていました。このままでは生きていけないのではという気持ちになっていったんです。加えて継母との折り合いの悪さとか、親が家庭の外で作った子供と一緒に住んでいる状況なども変えたくてとにかく東京に出て行きたいという気持ちがありました。そこで大学受験ということが頭に浮かびました。また、その時、中東での紛争の問題が連日報道されていたんです。「自分も不条理の中で生きてきたけど、他の国の人が攻めてきて家族がなくなるということももっと不条理で苦しいだろうな」「大学で学んでそういう人たちを助けられるようになりたい」と思ったのもあります。

でもやはり一番の理由は自分を変えたいということだったと思います。「このままでは生きていけない」という危機感です。バイトがうまくいってたり、仲間と仲よかったりしたら変わろうと思わないじゃないですか。頑張るとするのは今の居心地が悪いから頑張るの

ではないでしょうか。「頑張ること」と「現状に満足していないこと」はセットだと思います。会社もそうです。事業を伸ばしたいと思うから頑張れるのです。今のままでよければ、人は頑張れません。苦しい状況にあっても、頑張ることによって、その苦しさは「物語」に変えていくことができます。

ー一流企業を4か月で休職されました。どのような状況だったのでしょうか。

簡単に言うと、働き方が自分に合わなかったということです。僕は、合理的じゃないことと、朝の早起きがすごい苦手なんですね。朝満員電車で揺られて体力を消耗して会社に行って仕事を始めるよりも、1時間遅らせて空いた電車を利用して、体力を蓄えていった方が効率いいと思います。それを一律でコントロールするのは合理的じゃないですよね。そんな話をして、まず揉めましたね。今でこそフレックスや在宅勤務のような柔軟な考え方も珍しくありませんが、当時はまだ僕にとっては苦しい時代でした。

また、教員の方は、配属校に関わらず仕事内容がほぼ決まっているかもしれませんが、大企業の場合はどこに配属されるか分からず、部署によって仕事が大きく違います。僕は石油の埋蔵量を計算して投資額を決めていく部署に配属されて、同期は東大の大学院で石油工学を勉強した人でした。僕自身は、「石油工学のプロになるわけでもないのに、何でここにいるんだろう」と思っていました。

発達障害があるということは、大勢に合わせた基準になじめないということだと思います。どんな環境でも頑張れる人ばかりではないということです。世の中にはスーパーマンがいて「どこに配属されても楽しくやれます」「どんな職業でも頑張れます」「何時間でも働けます」などいろいろな人がいると思いますが、発達障害がある方はやはり仕事内容は選ばなければいけないと思います。

もう一つの悩みは、中東やアフリカで油田を買う自分たちの仕事、世界で資源の奪い合いによる紛争をつくりだしていたことです。その話を上司にしたところ「そんなこと考えたこともなかったよ」と言われたのです。上司は当時40歳を超えていたと思います。それを聞いて、僕が40歳になったときにこんな人になりたくないと思ったのです。僕は、大学時代にはパレスチナやバングラデシュで紛争や貧困をなんとかしたくて活動していたのに、そんな自分が嘘になると。それで「この仕事はやりたくないけど、何かスキルがあるわけではないし、食べていかなければいけないし…」ということいろいろ思い悩んでうつになりました。仕事を始めて4か月半で休職に入り1年後に辞めました。



【勉強を使って助けたい】

一起業のきっかけは。

やはり食べていかなければいけないということです。そして、その時の僕には勉強を教えるスキルしかなかったので、そこをスタートにしました。その上で、「社会の中で困難を抱えた人の支援をしたい」という自分の中のミッションもありました。勉強

を使って世の中で困っている人を助けようと思い、自分の経験から、不登校の子たちを対象にした塾という形になっていきました。

起業して半年ぐらいは、あまり生徒が集まりませんでした。Webのマーケティングなどを独学で実践して少しずつ生徒が来るようになりました。起業するということは、マーケティングだけでなく、人事制度や経理の仕組みなども学ばなければいけないし、就労支援ですと利用者の方の障害の種類や服薬の薬まで分かっている必要はあります。

一子供との向き合い方で気をつけていることは。

目線を子供側に置くことです。弊社の行動規範の一つに、「善意に基づく自己満足の支援をしない」というものがあります。先ほどの不登校の話ではありませんが、「電話かけなきゃ」という先生側の思いだけで連絡を取るのではなく、その子にとって今連絡を取ることがよいのかどうなのか、他の方法があるのか、それとも全くしないことがよいのか、その子に合わせて考えて対応していくということです。関連して、キズキ共育塾では、教室・各先生の生徒さんの退塾率（塾を辞める生徒さんの数・割合）をチェックしています。退塾率の高い教室や先生については、子供目線で良い支援ができていないのかを確認をします。

ただし、先生と子供には相性があるので、一概に退塾率だけで「良い支援をしているかどうか」を測ることはできません。子供の支援はチーム戦だと思っています。先生も、この生徒には合わなかったけど他の生徒にはぴったり合うということもあるので、生徒に合わせて担当を柔軟に替えていきます。

学校もそうだと思います。担任の先生が40人の子供たちを1人で抱え込むことは限界があります。学校が全てを抱え込むのではなく、教育委員会や福祉関係、そして民間企業とも協力して支援を必要としている子供たちをサポートしていくことが重要です。

例えば、弊社は、大阪市大正区から生活困窮家庭の子供の学習支援を受託しています。同区では、支援を

必要としている子供について、役所の福祉課・学校・民生委員・委託されている民間企業（弊社）で常に会議を行っています。その会議を経て、適切な支援を決定し実施していく仕組みができています。各種団体がそれぞれの強みを生かして分担しながら支援していくような仕組み作りが、これから求められると思います。

一今後の活動について。

うつや不登校が苦しい理由の一つには、「もうやり直しができないかもしれない」という思いを抱えることがあります。だから、「誰もがやり直しが可能なんだ」ということが広く社会で常識になれば、そうした苦しみはなくなります。そういう社会にするために、会社をもっと広げていきたいと思っています。キズキ共育塾の例では、全国に教室を展開することはもちろんですが、デジタルツールを利用して教室に来なくても先生とつながれるような仕組みも作っていききたいです。キズキビジネスカレッジでは、もっと企業と一緒に、うつになる前の予防や回復を図っていくようにしていきたいです。どれだけ多くの人のやり直しを支えることができるかを、会社としてこれからも取り組んでいきたいです。

不登校や会社を休むこと、辞めることが悪いことだとは思いません。その後、やり直せない社会が間違っているのです。休んでいる時間さえも、後から振り返れば「意味があった」と思えるような、やり直しが当たり前になる社会を作っていきたいと思っています。



【代々木の（株）キズキ 本部にて】

インタビューを終えて

お話を聞いて「何度でもやり直せる社会をつくる」という安田さんの強い信念と使命感が伝わってきました。「子供の目線に立つ」ということは、個別最適化の教育、多様性社会への対応、学校外の他機関との連携などつながり、公教育として果たさなければならぬ役割について考えさせられました。